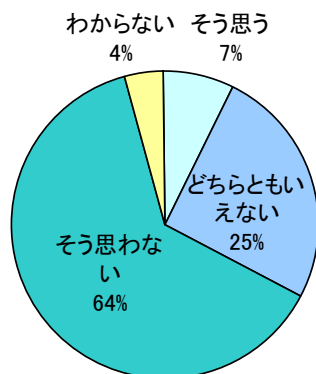


る」と 39% (168 人) が答え、治験の医療上のメリットが認識されている一方で、「副作用などのリスクが不安である」と 58% (247 人) が答えており、治験に対するデメリット(不安)もぬぐえないことがうかがえる。これは、治験参加者や一般患者と同様の傾向であった。

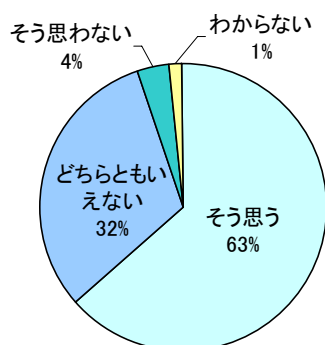
4. 7. 4. 治験の情報提供の現状に関する考え方及びニーズ

Q9. 我が国では、「治験」に関する情報提供は行われていると思いますか。(〇はひとつだけ。)



そう思う	32人
どちらともいえない	108人
そう思わない	270人
わからない	18人
計	428人

Q10. 「治験」に関する情報を知りたいと思いますか。(〇はひとつだけ。)

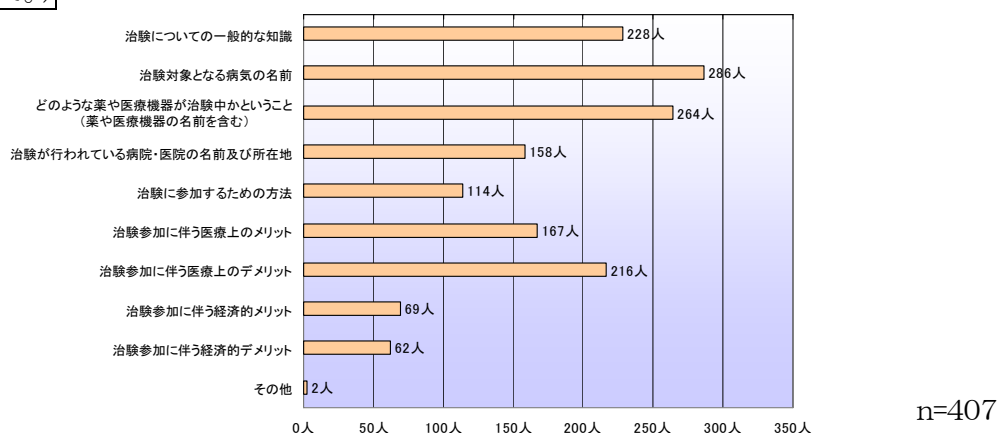


そう思う	271人
どちらともいえない	136人
そう思わない	15人
わからない	6人
計	428人

63% (270 人) の方が「治験」に関する情報提供は行われているとは思わないと答え、「どちらともいえない」と答えた方をあわせると、88% (378 人) の方が情報提供は行われていないという印象を持っていると考えられる。これは、治験参加者のグループや、一般患者のグループより、「情報提供は行われていない」という印象を持つ方の割合が高い。一方で、63% (271 人) の方が「治験」に関する情報を知りたいと思うと答えており、治験参加者のグループや一般患者のグループ以上に、「治験」に関する情報のニーズは高いと考えられる。

Q11. Q10で「1.」または「2.」に○をつけた方に伺います。どんな情報を知りたいと思いますか。

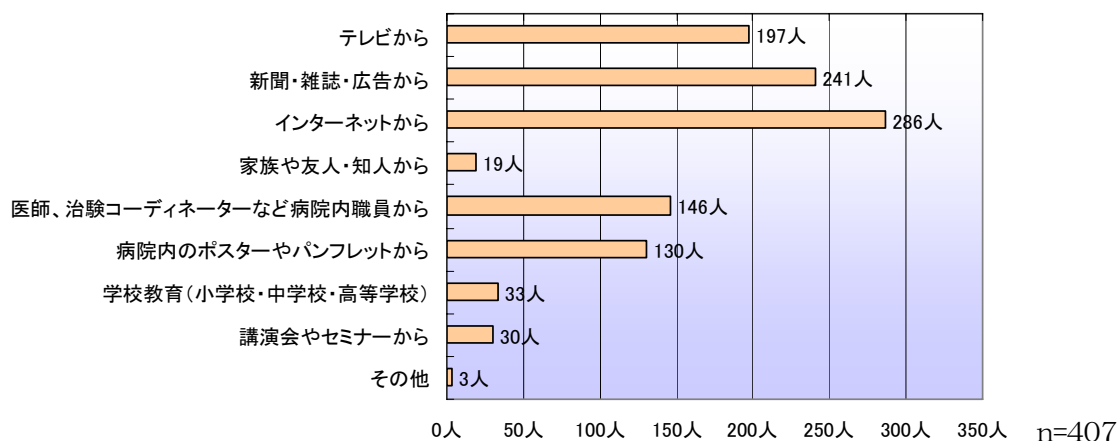
(○は5つまで。)



「治験についての一般的な知識」56% (228 人) や、「治験参加に伴う医療上のメリット」41% (167 人) 及び「治験参加に伴う医療上のデメリット」53% (216 人) といった、治験に関する一般的な治験啓発情報に関するニーズ以上に、「治験対象となる病気の名前」70% (286 人) や「どのような薬や医療機器が治験中かということ」65% (264 人) といった治験実施情報に関するニーズが高いことがうかがえる。一般生活者の間では、病院との接触がある治験参加者や一般患者以上に、治験実施情報に関するニーズが高い傾向が示唆された。

Q12. Q10で「1.」または「2.」に○をつけた方に伺います。「治験についての一般的な知識」は、

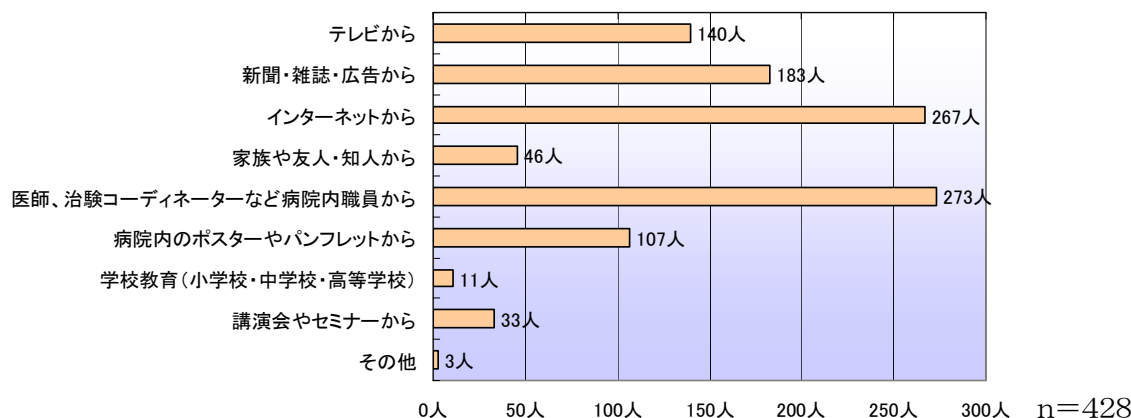
どのような方法で知りたいと思いますか。(○はいくつでも。)



「治験に関する一般的な知識」は、「医師、治験コーディネーターなど病院内職員から」36% (146 人) から知りたいというニーズもあったが、「インターネットから」70% (286 人) が最も高く、「新聞・雑誌・広告から」59% (241 人)、「テレビから」47% (191 人) といった報道媒体から知りたいというニーズが高く、病院との接点がある治験参加者や一般患者と異なった傾向を示した。

自由回答欄には回答者のうち 3 人の記載があり、そのなかに政府(1 人)、公共交通機関のポスター(1 人)からの記載があった。

Q13. あなたやあなたの家族が治験に参加する場合、現在実施中の治験の情報ほどのような方法で知りたいと思いますか。(〇はいくつでも。)

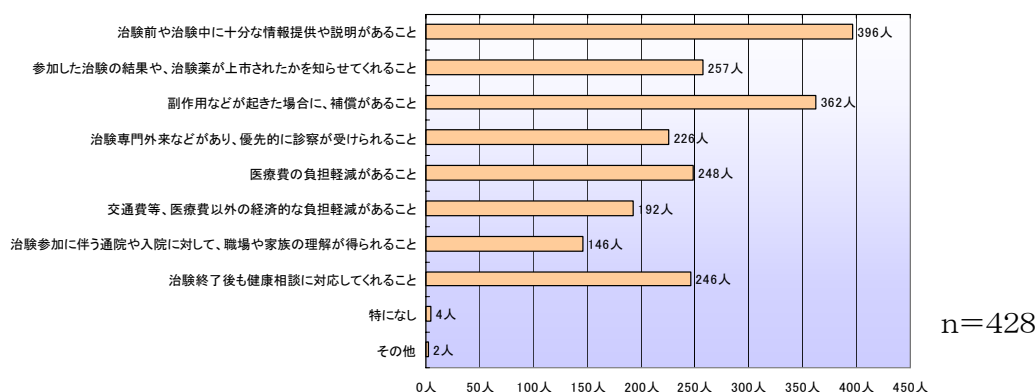


「実施中の治験の情報」については、「医師、治験コーディネーターなど病院内職員から」64% (273人) 及び「インターネットから」62% (267人) が多かった。このグループがインターネットユーザーであることから、インターネットに対するニーズが高いものと推察される。また「新聞・雑誌・広告から」44% (188人)、「テレビから」33% (140人) といった報道媒体も続いた。Q12とあわせると、インターネットに対するニーズが特徴的であるが、一般的な情報は報道媒体からであっても、実施中の治験の情報は病院職員から、より正確な情報を得たいというニーズがうかがえる。

自由回答欄には回答者のうち2人の記載があり、公的な機関、第三者的な団体からとの記載があった。

4.7.5. 治験に対するニーズ

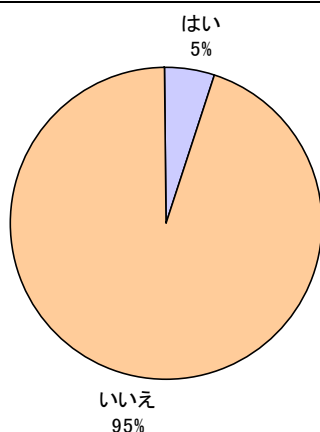
Q14. 「治験」に関して望むことはなんですか。(〇はいくつでも。)



「治験前は治験中に十分な情報提供や説明があること」93% (396人) や「治験終了後も健康相談に対応してくれること」57% (246) が多く、医療関係者と十分なコミュニケーションをとることを望んでいることがうかがえる。また、「参加した治験の結果や、治験薬が上市されたかを知らせてくれること」60% (257人) といった、結果のフィードバックに関するニーズも高い。一方で、当然のことながら、「副作用などが起きた場合に、補償があること」85% (362人) といった、安全性に対するニーズも高いことがうかがえる。これらは、治験参加者、一般患者のグループと同様の傾向であった。

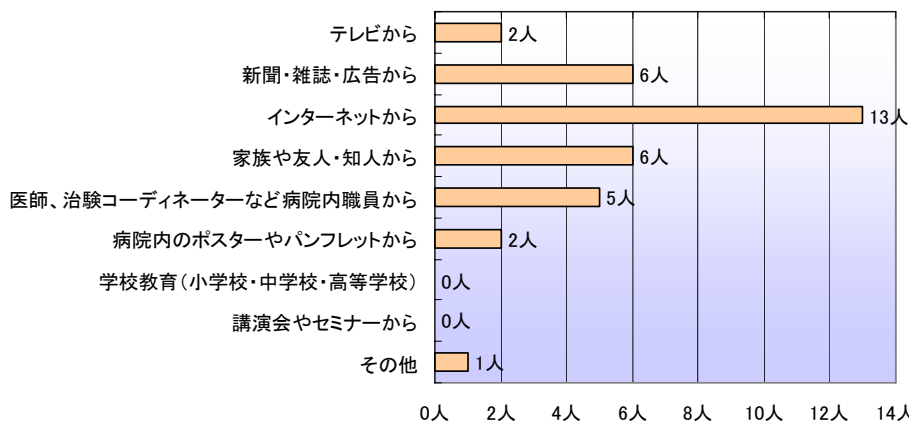
4. 7. 6. 治験参加者における治験参加のインセンティブ・デメリット

Q15. あなたは「治験」に参加したことがありますか。(〇はひとつだけ。)



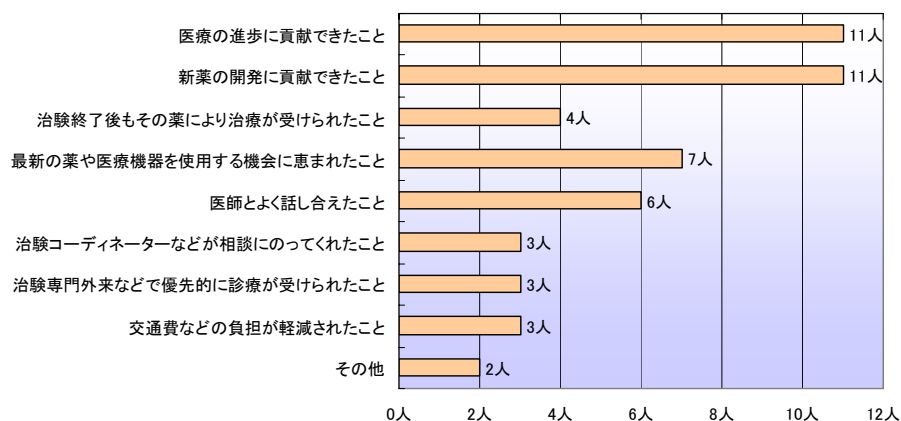
はい	22人
いいえ	406人
計	428人

Q16. 治験に参加したきっかけとなった情報はどこから知りましたか。(〇はいくつでも。)



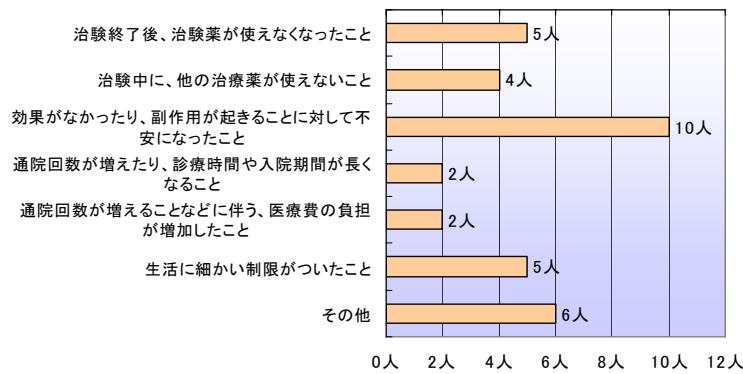
このグループがインターネットユーザーであることから、「インターネットから」59%(13人)が最も多く、続いて「新聞・雑誌・広告から」27%(6人)、「家族や友人・知人から」27%(6人)が続いた。

Q17. 「治験」に参加して良かったことは何ですか。(〇はいくつでも。)



「新薬の開発に貢献できたこと」50%(11人)や「医療の進歩に貢献できたこと」50%(11人)といった、社会貢献がメリットとして高く認識されていることが示唆された。治験参加者や一般患者のグループでメリットとして高く認識されていた、「治験コーディネーターなどが相談にのってくれたこと」や「医師とよく話し合えたこと」はそれぞれ14%(3人)及び27%(6人)で少なかった。

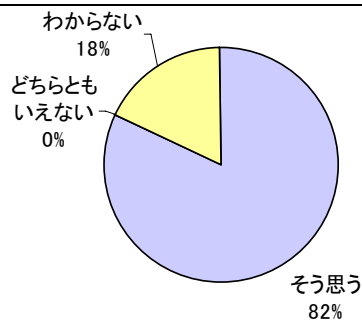
Q18. 「治験」に参加して良くなかったことはなんですか。(〇はいくつでも。)



n=22

「効果がなかったり、副作用が起きることに対して不安になったこと」をあげた方が45% (10人)と最も多かった。また「治験終了後、治験薬が使えなくなったこと」23% (5人)や「治験中に他の治療薬が使えないこと」18% (4人)や「生活に細かい制限がついたこと」23% (5人)といった物理的な制約もデメリットとして認識されていることが示唆された。

Q19. 次回も治験に参加したいと思いますか。(〇はひとつだけ。)



そう思う	18人
どちらともいえない	0人
わからない	4人
計	22人

治験に参加するメリット・デメリットを総合して、「次回も参加したい」と答えた方が82%と圧倒的に多数を占めた。

4.7.7. 考察

一般患者での結果と比較すると、インターネット利用者層の特徴が多少うかがえる。すなわち、「治験」という言葉の認知度は一般患者よりは高い。治験に関する情報の入手先は health クリックと同様インターネットが多く、理解度も同様であった。治験の必要性の理解は health クリックとほぼ同様である。治験の情報提供には health クリックと同様に不十分と考える割合が高いが、知りたいと思う割合は一般患者よりも少し少ない。治験に関する情報の入手先としては、health クリックと同様インターネットからが多い。一方、治験に関する情報の内容や治験に対する要望内容は一般患者、health クリックと同様である。

自由回答欄への書き込みの人数は health クリックよりも少なく、回答者全体を反映しているかは不明であるが、情報の正確性、公平性を求める意見があった。

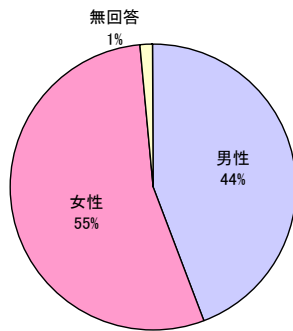
以上の一般生活者の health クリックと日経リサーチの結果を総合して考えると、インターネット利用者に対しては、インターネットを経由する情報提供に、公的な関与などによる信頼できるホームページの運営が付加されれば、治験のより正確な情報が広範に発信できると考えられる。

4. 8. 全体集計

治験参加者 189 人、一般患者 300 人、一般生活者(394 人+428 人)の計 1311 人全体について集計を行った。

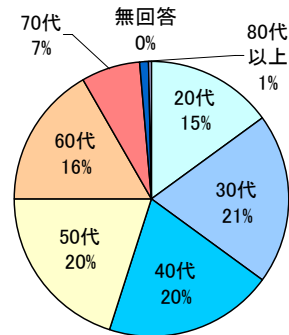
4. 8. 1. 回答者の属性

1)性別



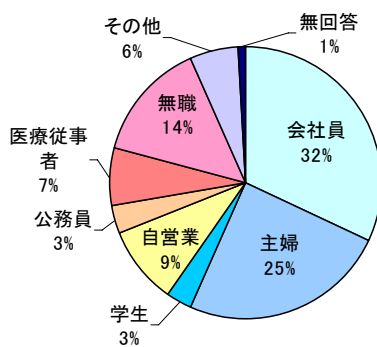
男性	579人
女性	713人
無回答	19人
計	1,311人

2)年代



20代	197人
30代	262人
40代	261人
50代	264人
60代	216人
70代	94人
80代以上	12人
無回答	5人
計	1,311人

3)職業

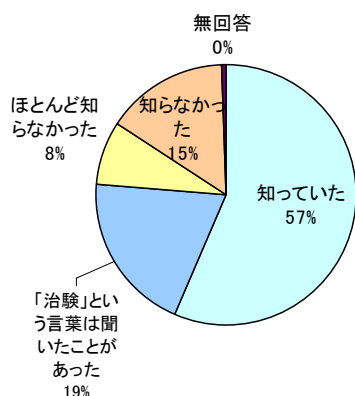


会社員	418人
主婦	324人
学生	41人
自営業	120人
公務員	45人
医療従事者	90人
無職	187人
その他	75人
無回答	11人
計	1,311人

全体では、男女比としては、女性がやや多いがほぼ半々であった。年代、職業分布については広く分布していた。

4. 8. 2. 治験の啓発に関する現状

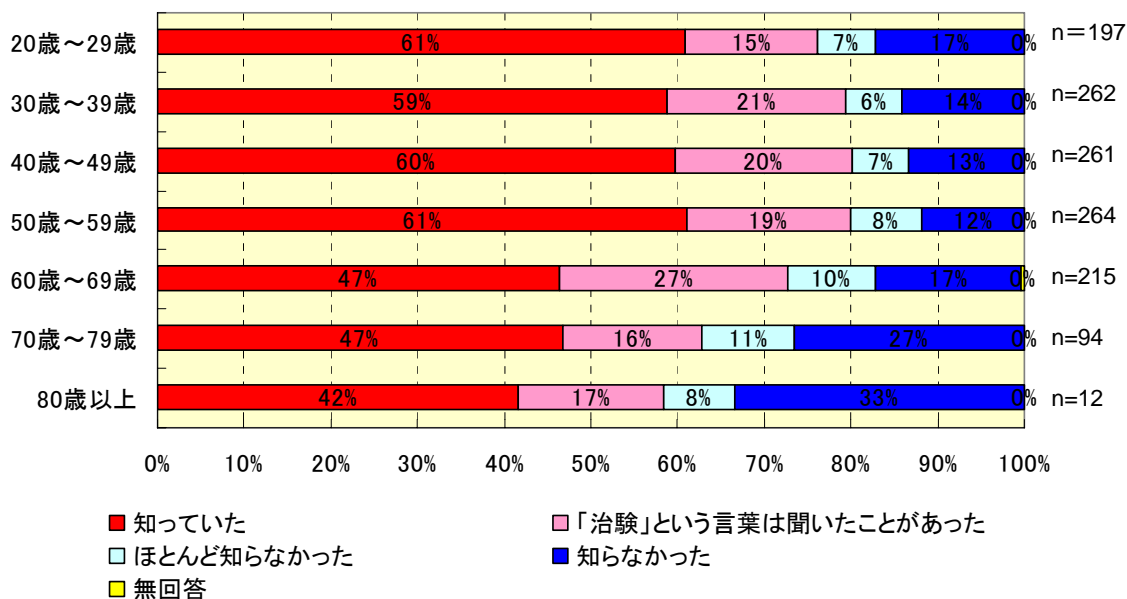
Q4. 今回のアンケートで上記の説明を読むまで、あなたは「治験」という言葉の内容を知っていましたか。(〇はひとつだけ。)



知っていた	740人
「治験」という言葉は聞いたことがあった	261人
ほとんど知らなかった	102人
知らなかった	202人
無回答	6人
計	1,311人

n=1311

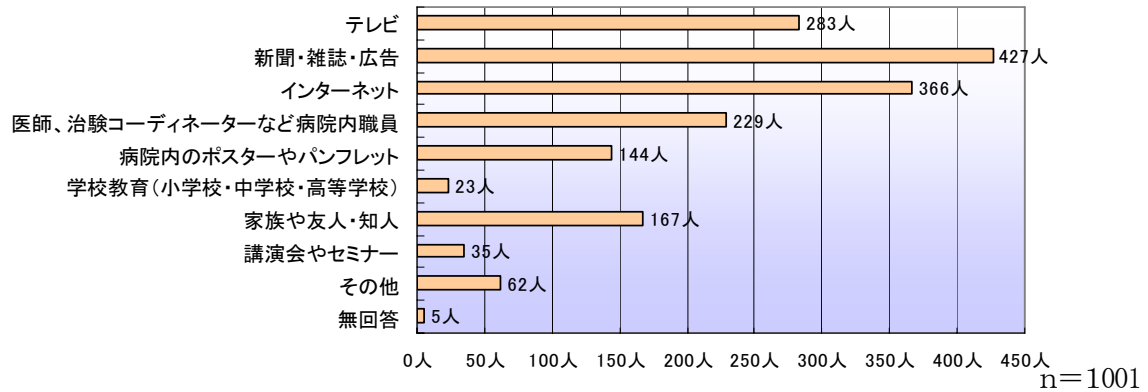
全体では、57%の回答者が「知っていた」と答え、「「治験」という言葉は聞いたことがあった」と答えただ方をあわせると、76%が「治験」についてなんらか聞いたことがあったと答えており、「治験」という言葉の認知は、高まっていることが示唆される。



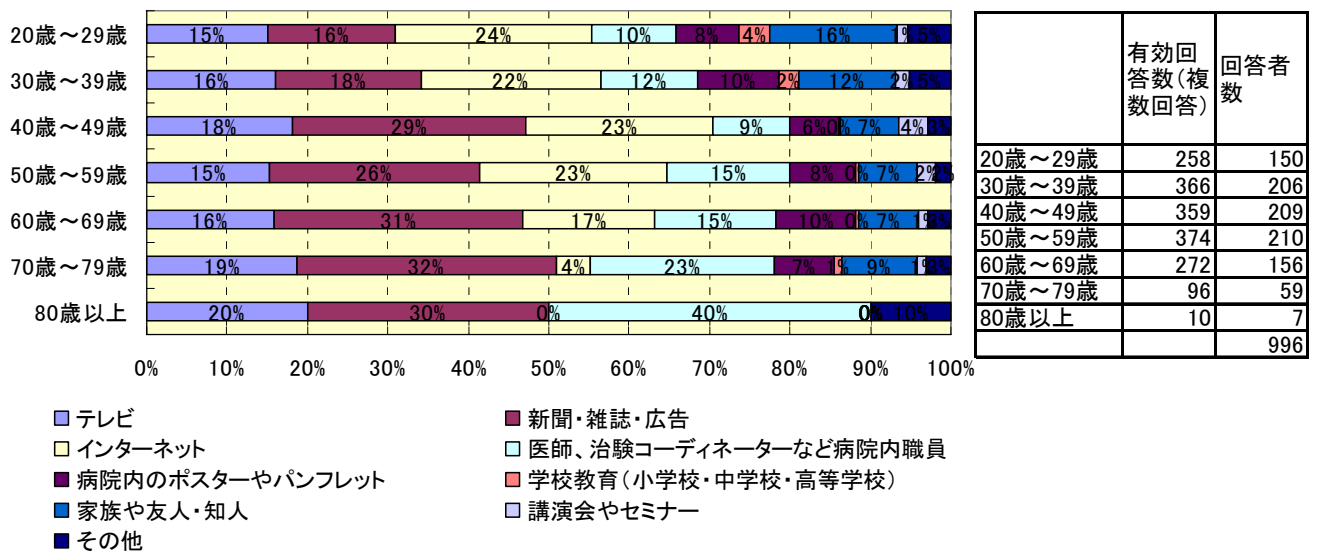
n=1306 (無回答の5名をのぞく。)

なお、年代別では、20代から50代までには大きな差は認められず、60代以上において、若干認知度が下がっていた。

Q5-1. 「治験」についてどのような方法で知りましたか。(〇はいくつでも。)



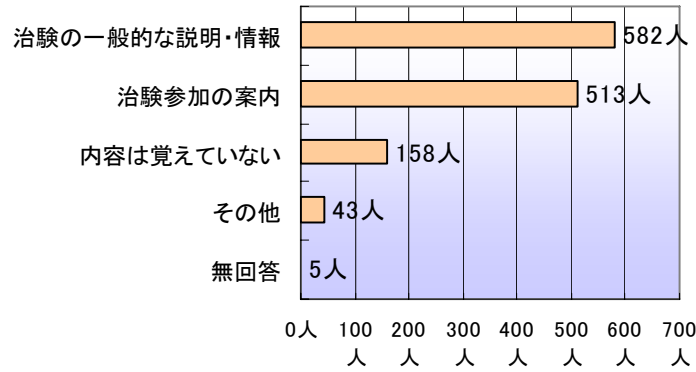
全体では、「新聞・雑誌・広告」から「治験」について知った回答者が最も多く(427人)、続いて、「インターネット」(366人)、「テレビ」(283人)、「医師、治験コーディネーターなど病院内職員」(229人)が続いた。新聞・雑誌・広告等の報道媒体を通じた治験に関する一般的な情報や被験者募集広告等を通じて治験を知りえる状況が示唆されている。なお、全体では、1311人のうち、本調査では一般生活者の822人が明らかなインターネットユーザーであるため、インターネットが上位に位置していると考えられる。



n=996(無回答の5名をのぞく。)

年代別では、インターネットから情報を得る割合が、年代が高くなるにつれて減少するとともに、「医師、治験コーディネーターなど病院内職員」の割合が高くなった。ただし、70歳以上についてはサンプル数が少ないことに留意する必要がある。

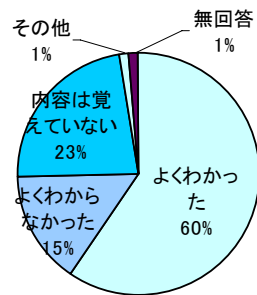
Q5-2. ご覧になった情報はどのようなものでしたか。(〇はいくつでも。)



n=1001

「治験の一般的な説明・情報」(582人)、「治験参加の案内」(513人)とも認知されていた。

Q5-3. ご覧になった情報は、よくわかりましたか。



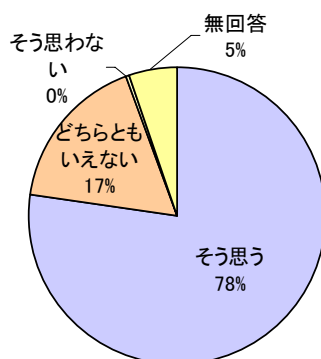
よくわかった	595人
よくわからなかった	149人
内容は覚えていない	231人
その他	15人
無回答	11人
計	1,001人

n=1001

「よくわかった」と答えた方が60%(595人)であった。

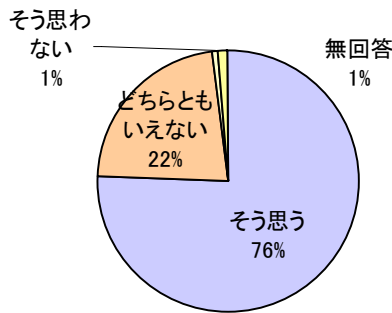
4. 8. 3. 治験に関する考え方

Q6. 医療先進国である「我が国での治験」は、これからも必要だと思いますか。(〇はひとつだけ。)



そう思う	1,013人
どちらともいえない	225人
そう思わない	4人
無回答	69人
計	1,311人

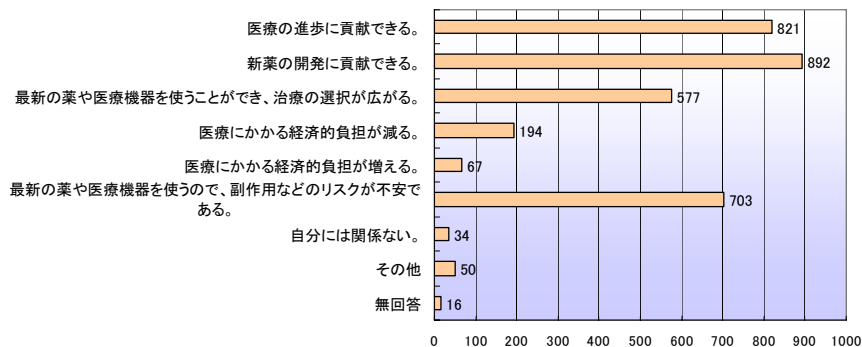
Q7. 治験を行うのにはリスクを伴いますが、優れた新薬を開発するためには、「治験」を行うことは必要だと思いますか。(〇はひとつだけ。)



そう思う	992人
どちらともいえない	292人
そう思わない	14人
無回答	13人
計	1,311人

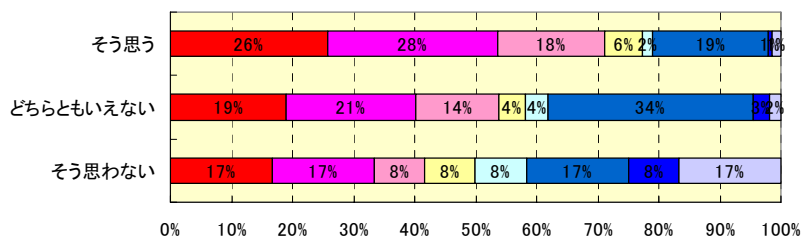
約 7 割以上の方が、「我が国での治験」はこれからも必要」と答え、また「リスクが伴っても「治験」を行うことは必要」と答えている。治験の必要性が広く認識されていると考えられる。

Q8. 「治験」についてどのような印象をお持ちですか。(〇はいくつでも。)



「医療の進歩に貢献できる」及び「新薬の開発に貢献できる」と答えた方がそれぞれ 892 人及び 821 人で最も多く、社会全体への貢献意識が高いことがうかがえる。「治療の選択肢が広がる」と 577 人が答え、治験の医療的メリットが認識されている一方で、「副作用などのリスクが不安である」と 703 人が答えており、治験に対するデメリット(不安)もぬぐえないことがうかがえる。これは、治験参加者、一般患者、一般生活者の間で大差はなく、社会への貢献意識として治験を捉えている一方で、被験者個人の立場として「副作用などのリスク」についての不安はぬぐえないことを明らかに示している。

○我が国での治験の必要性(Q6)と治験の印象(Q8)

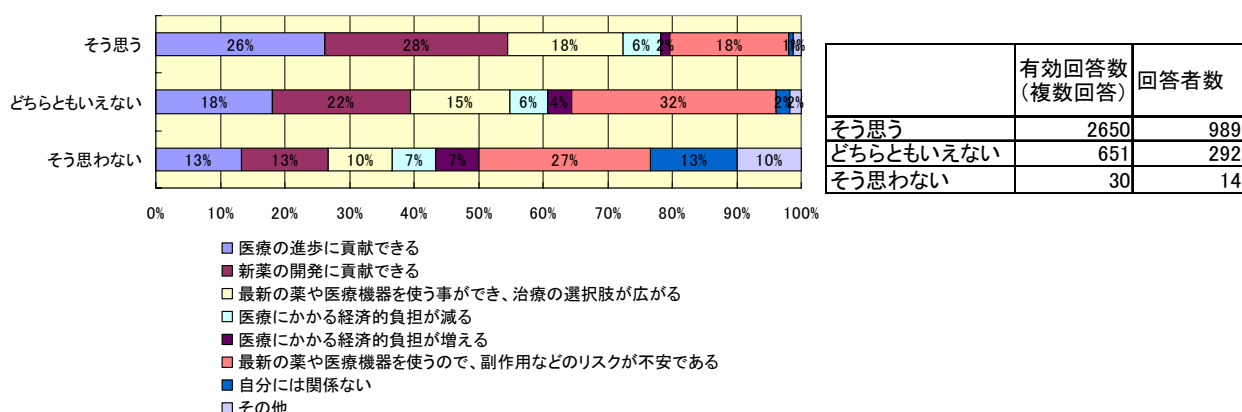


	有効回答数 (複数回答)	回答者数
そう思う	2719	1012
どちらともいえない	453	223
そう思わない	12	4

- 医療の進歩に貢献できる
- 新薬の開発に貢献できる
- 最新の薬や医療機器を使う事ができ、治療の選択肢が広がる
- 医療にかかる経済的負担が減る
- 医療にかかる経済的負担が増える
- 最新の薬や医療機器を使うので、副作用などのリスクが不安である
- 自分には関係ない
- その他

n=1246 (Q6無回答の 65 人をのぞく。)

○リスクのある治験の必要性(Q7)と治験の印象(Q8)

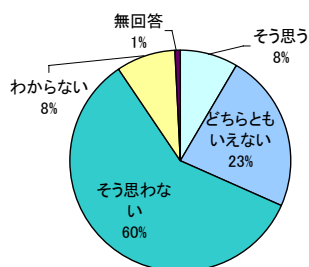


n=1295(無回答の16人をのぞく。)

Q6及びQ7とも、治験の必要性を認識しているグループの方が、治験に対してポジティブなイメージを持っていることが示唆された。

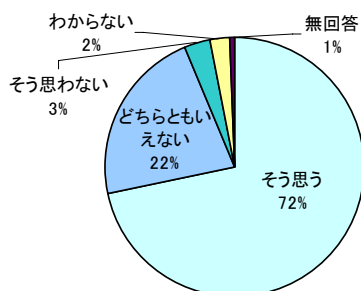
4. 8. 4. 治験の情報提供の現状に関する考え方及びニーズ

Q9. 我が国では、「治験」に関する情報提供は行われていると思いますか。(○はひとつだけ。)



そう思う	110人
どちらともいえない	305人
そう思わない	774人
わからない	111人
無回答	11人
計	1,311人

Q10. 「治験」に関する情報を知りたいと思いますか。(○はひとつだけ。)

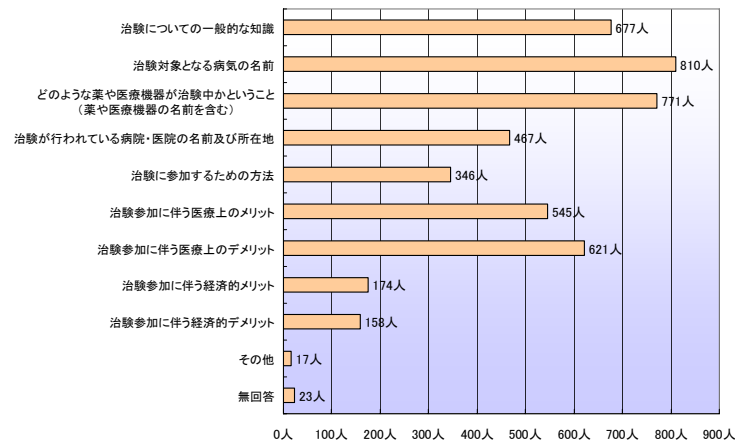


そう思う	939人
どちらともいえない	288人
そう思わない	44人
わからない	32人
無回答	8人
計	1,311人

6割(774人)の方が「治験に関する情報提供は行われているとは思わない」と答え、「どちらともいえない」と答えた方をあわせると、実に8割以上の方が情報提供は行われていないという印象を持っていると考えられる。なお、情報提供は行われていないという印象は、治験参加者<一般患者<一般生活者の順に高くなっており、病院との接点がない一般生活者ほど、治験の情報に接する機会が少なくなっていることが示唆される。一方で、約7割(939人)の方が「治験に関する情報を知りたいと思う」と答えている。これらの結果から、わが国の治験に関する情報提供は十分ではないが、「治験」に関する情報のニーズは高いと考えられる。

Q11. Q10で「1.」または「2.」に○をつけた方に伺います。どんな情報を知りたいと思いますか。

(○は5つまで。)

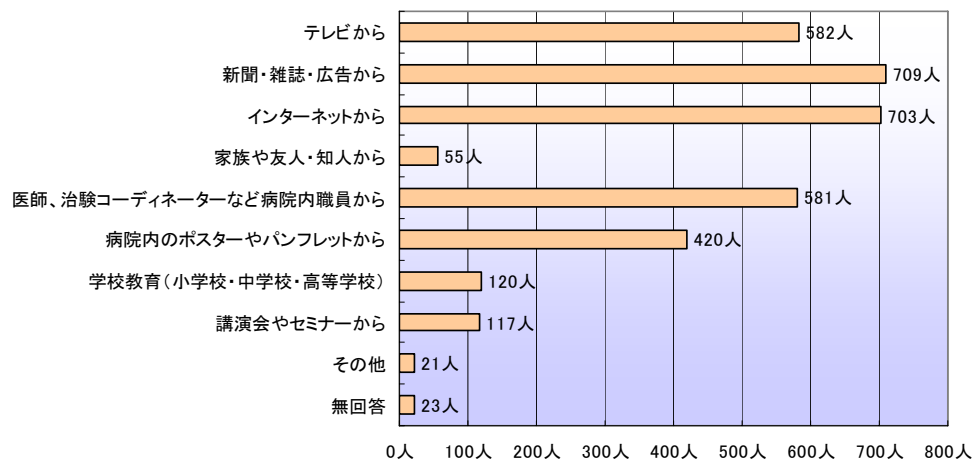


n=1227

「治験についての一般的な知識」(677人)や、「治験参加に伴う医療上のメリット」(545人)及び「治験参加に伴う医療上のデメリット」(621人)といった、治験に関する一般的な治験啓発情報に関するニーズが高い。また、「治験対象となる病気の名前」(810人)や「どのような薬や医療機器が治験中かということ」(771人)といった治験実施情報に関するニーズも高いことがうかがえる。

Q12. Q10で「1.」または「2.」に○をつけた方に伺います。「治験についての一般的な知識」は、

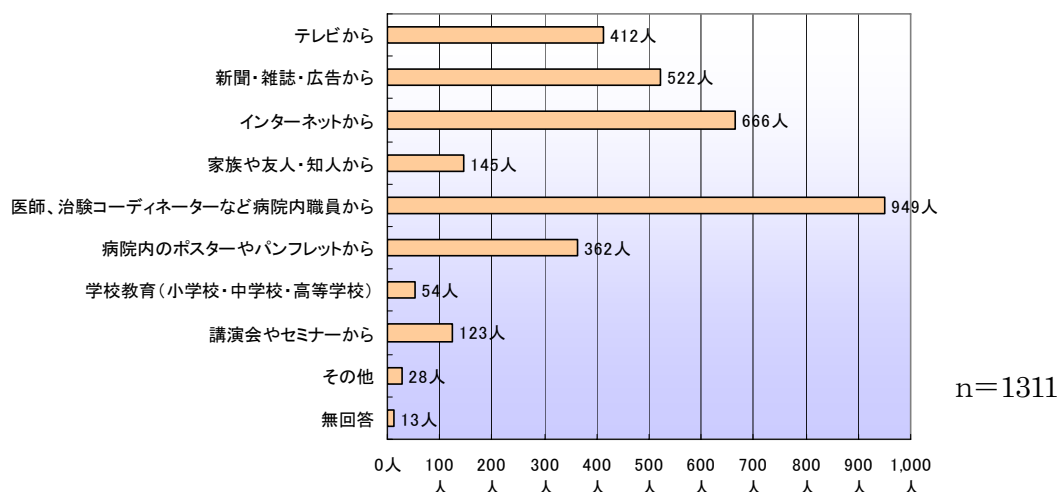
どのような方法で知りたいと思いますか。(○はいくつでも。)



n=1227

「治験に関する一般的な知識」は、「医師、治験コーディネーターなど病院内職員から」(581人)から知りたいというニーズもあったが、「新聞・雑誌・広告から」(709人)が最も多く、「インターネットから」(703人)、「テレビから」(582人)といった報道媒体から知りたいというニーズが高かった。なお、1311人のうち822人の一般生活者がインターネットユーザーであることからインターネットニーズが高くなっている可能性がある。

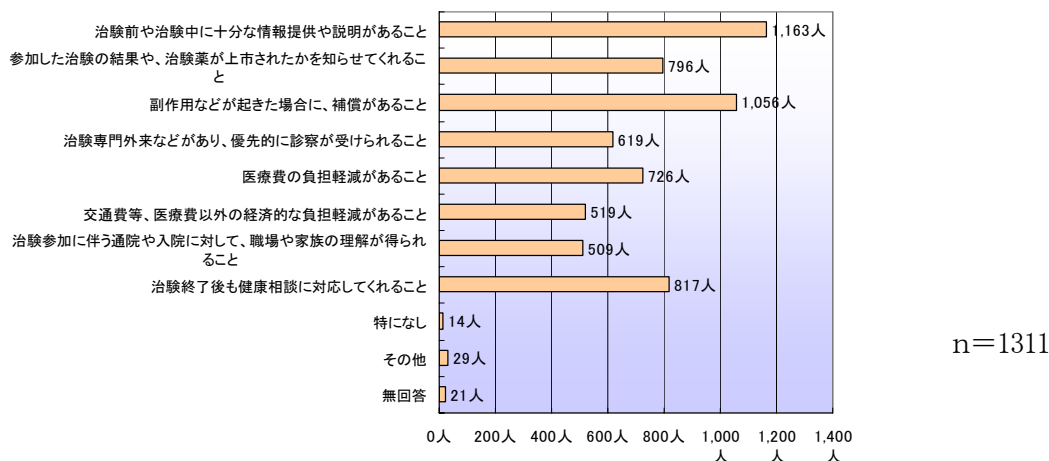
Q13. あなたやあなたの家族が治験に参加する場合、現在実施中の治験の情報ほどのような方法で知りたいと思いますか。(〇はいくつでも。)



「実施中の治験の情報」については、「医師、治験コーディネーターなど病院内職員から」(949人)が圧倒的に多く、「インターネットから」(666人)、「新聞・雑誌・広告から」(522人)や「テレビから」(412人)といった報道媒体が続いた。Q12とあわせると、一般的な情報は報道媒体からであっても、実施中の治験の情報は、報道媒体よりもむしろ病院内職員といった専門職から正確で確実な情報を得たいというニーズが伺えた。

4. 8. 5. 治験に対するニーズ

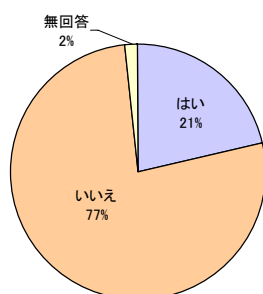
Q14. 「治験」に関して望むことはなんですか。(〇はいくつでも。)



「治験前は治験中に十分な情報提供や説明があること」(1163人)や「治験終了後も健康相談に対応してくれること」(817人)が多く、医療関係者と十分なコミュニケーションをとることを望んでいることがうかがえる。また、「参加した治験の結果や、治験薬が上市されたかを知らせてくれること」(796人)といった、結果のフィードバックに関するニーズも高い。一方で、当然のことながら、「副作用などが起きた場合に、補償があること」(1056人)といった、安全性に対するニーズも高いことがうかがえる。

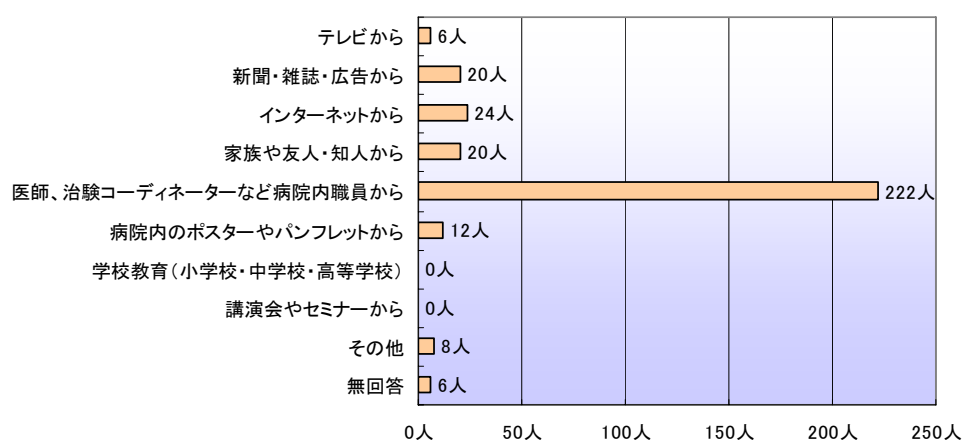
4. 8. 6. 治験参加者における治験参加のインセンティブ・デメリット

Q15. あなたは「治験」に参加したことがありますか。(〇はひとつだけ。)



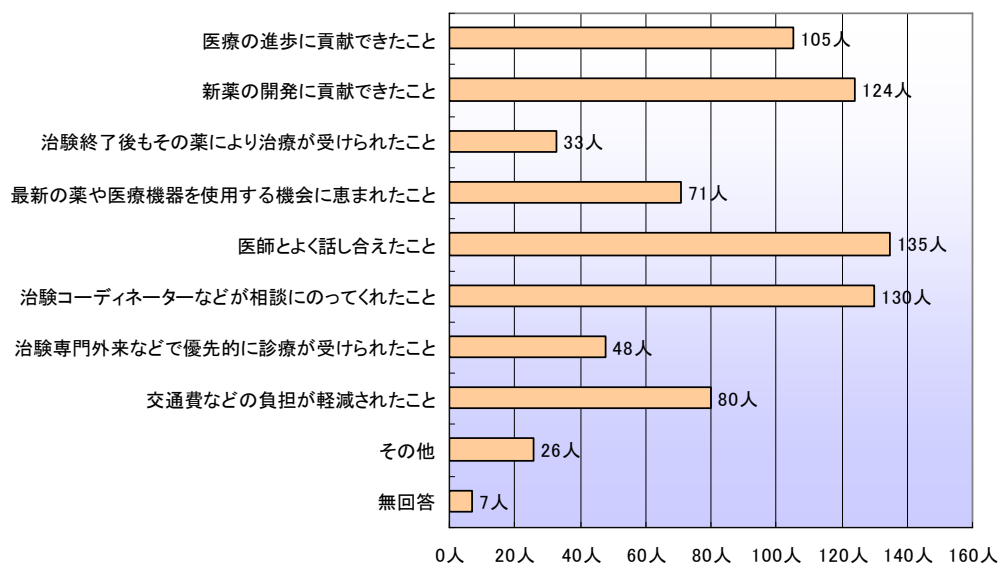
はい	280人
いいえ	1,009人
無回答	22人
計	1,311人

Q16. 治験に参加したきっかけとなった情報はどこから知りましたか。(〇はいくつでも。)



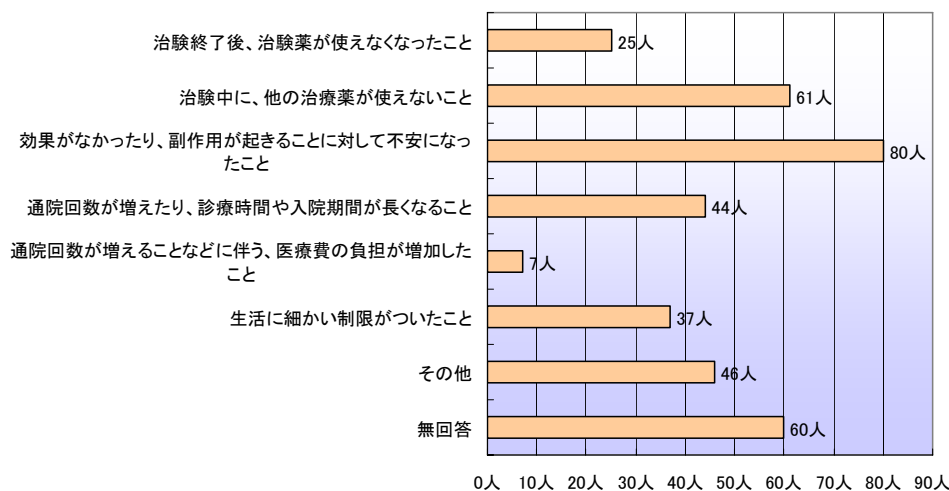
ほとんどの者が「医師、治験コーディネーターなど病院内職員から」治験に参加したきっかけとなる情報を得ている(222人)。「新聞・雑誌・広告から」(20人)、「インターネットから」(24人)などもあり、治験募集広告のような報道媒体を利用した治験実施情報がきっかけとなって参加する方も少ないながらもいることが示唆された。

Q17. 「治験」に参加して良かったことは何ですか。(〇はいくつでも。)



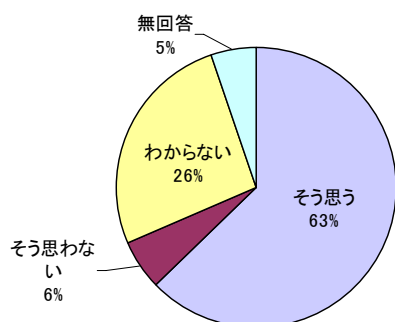
「医師とよく話しあえたこと」(135人)や「治験コーディネーターなどが相談にのってくれたこと」(130人)が多く、医療関係者との良好なコミュニケーションが得られたことをメリットと認識していることが示唆された。また、「新薬の開発に貢献できたこと」(124人)や「医療の進歩に貢献できたこと」(105人)といった、社会貢献もメリットとして認識されていることが示唆された。

Q18. 「治験」に参加して良くなかったことはなんですか。(〇はいくつでも。)



当然のことながら、「効果がなかったり、副作用が起きることに対して不安になったこと」という、治験が本来持っている科学的不確かさをあげた方が80人と最も多かった。また「治験中に、他の治療薬が使えないこと」(61人)や「通院回数が増えたり、診療時間や入院時間が長くなること」(44人)、「生活に細かい制限がついたこと」(37人)といった物理的な制約もデメリットとして認識されていることが示唆された。さらに、「治験終了後、治験薬が使えなくなったこと」(25人)もあげられており、治験薬での治療が継続できないこともデメリットの一つとなっている可能性が示唆された。

Q19. 次回も治験に参加したいと思いますか。(〇はひとつだけ。)



そう思う	176人
そう思わない	16人
わからない	73人
無回答	15人
計	280人

「次回も参加したい」と答えた方が63%と大半を占めており、治験に参加するメリット・デメリットを総合しての判断は、治験に対してポジティブな方向になっていることが示された。